

2015 年秋学期レポート

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業
第 10 期留学奨学生
山本綾乃

Gallaudet University
M.A. Deaf Education Special Program

8 月上旬に念願のギャロデット大学院への進学が決まり、長年の夢が叶いました。新しいキャンパスライフを思い描きつつギャロデット大学の門をくぐると、そこにはハリーポッターのような魔法の世界の建物が立ち並んでいました。さらに世界中から集まった仲間達との出会いもありました。その感動は大きく、この場所にいる自分が信じられないほどでした。ただ大学院の講義は議論中心で、十分な予習をしないと全く理解できないという現実が待ち構えていました。

ろう教育学部には二つのコースがあります。それは、アメリカの教育免許取得を目的とするコースとアメリカの教員免許取得を目的とせず、大学院レベルの学位取得を目指す留学生のためのコースです。しかし、自国の教員免許を既に持っていることが条件となります。どちらに在籍するかによって、取得できる講義の数や実習の時間数が異なります。私は後者の **Special Program** に在籍しています。日本での学部時代に障害児教育を専門に学んでいたことから、指導案の書き方やろう教育の基礎的な専門知識は持っていたので、“ああそういうことなのか、なるほど”と思えることも多かったです。

では学習面と生活面に分けて報告させていただきます。

○学習面

2015 年秋学期は、ろう教育関係の講義を 4 つ受けました。大学院の講義は、週に一回三時間ずつあります。主に議論中心であるため、どれだけ予習できたかが大きなカギとなります。予習内容とは、例えば教科書や本(それぞれ一章ごと)、論文を読む、映像(15 分～30 分)を 3 本見る、手話動画付きパワーポイント(30 分程度)を見るなどです。議論する際に必要なキーワードや内容の理解が重要になってきます。ようやく、“ろう教育”について専門的に勉強できるようになり、とても密度の濃い学期でした。

【Fall2015-EDU600-01: Fall2015-EDU600-01 K-12 Curriculum and Instructional Technology】

指導案の作り方について学ぶクラスでした。初めに自分の希望する学年、学習レベル、教科、学習テーマを設定し、一学期かけて一週間分の指導案を作り上げました。私は、小学 4 年、学年相当レベル、英語、新聞と設定しました。まず、日本でいう学習指導要領のように、アメリカでも国が指定している目標がありま

す。それに従いながら、毎日の授業それぞれに目的を作ります。そして一回ごとの学習の流れを作ります。それは必ず目的と筋を通さなければなりません。決まった表現方法があり、簡単そうですが一番苦労しました。授業内容は、様々なテーマがあり、それに沿った指導案を作りました。必要に応じて、学習プリントを添付する、パワーポイントやプレゼンを作って、ハイパーリンクする必要もありました。さらに一週間の授業内容を子どもや保護者、他の教員と共有するために、興味深いサイトを10 引用したり、ホームページを作ったりする必要もありました。中間発表や最終発表もありました。なぜ決まった形式や単語を使って目標を決めなければならないのか、なぜ10のサイトを探さなければならないのか、またホームページを作るのか、教授に何度も質問しましたが、飲み込みが遅い自分にはなかなか理解できませんでした。恥ずかしいことにそれより以前に、このクラスが指導案作りのクラスだと気付いたのは5回ほどの受講後だったのです。更に中間発表の後にテーマを大きく変えてしまったので、教授には多大なご迷惑をおかけしてしまいました。しかし、目的や理由を理解した後はどんどん進めることができました。教授はとても優しい方で、どんな質問にも答えていただけたので、自分の中で一番印象に残るやりのあった講義となりました。

【Fall2015-EDU631-01: Fall2015-EDU631-01 Literacy Teaching and Learning: Elementary Grades】

読み書き能力について考えたり、絵本を使った指導案を作りました。5人という少人数で、教授との距離が近く、気軽に質問や意見を述べることができました。院生よりも学部生が多いクラスだったので、頭の柔軟な彼らから、絵本を使った活動の例などたくさんのアイデアをもらいました。またクラス見学のレポートや家族へのハンドブックを作る課題もありました。

【Fall2015-EDU701-01: Fall2015-EDU701-01 Deaf Learners and Education in Bilingual Communities】

ろうの歴史やろう教育、ろう文化について学びました。特に講義の前にたくさんの予習が必要だったのはこのクラスです。本や資料、論文、手話つきパワーポイント、映像など様々な資料の予習が欠かせず、クラスが始まったらすぐ話し合いのテーマをぽんっ！と投げかけられるというかなり難しい講義でした。学期末には一人ずつ自分の興味あるテーマを取り上げながらのプレゼン発表がありました。私は同級生に中国出身の留学生がいたので、彼女と一緒にそれぞれの国のろう文化や教育の現状をお話しました。アメリカ人学生が大変興味を持って下さり、たくさんの質問を頂けたことは嬉しかったです。世界中みんなが歩み寄って情報を共有し、共に手を取り合って、よりよいろう文化やろう教育を作っていけたら良いと改めて思うクラスでした。

【Fall2015-EDU785-01: Fall2015-EDU785-01 Field Experience and Seminar: Deaf Education】

このクラスは、学校見学のクラスです。どこも内容の濃い学校でそれぞれの理念を大切にしていました。以下、見学した5つの学校の特徴をご紹介します。

1、The River School (リバー校)

場所：ワシントン D.C.

対象：1歳～12歳の幼児、聴児（言語障害）、難聴児

特徴：口話教育。教室や体育館などの壁に雑音を吸収するパッドがある。ケンダルろう学校と連携しているため、手話を完全否定しているわけではない、各教室に本が100冊以上ある。隣の図書館と連携し、新しい本をどんどん取り寄せて、言葉の教育に力を入れている。

雰囲気：校内はやや狭いが、ガラス張りの壁なのでコミュニケーションがスムーズに図れる。

2、Clerc Center (ケンダルろう学校)

場所：ギャロデット大学内

対象：早期教育～高校

特徴：アメリカのろう学校でもトップクラスに入る教育を行っている

雰囲気：とても広く、のびのびとしている

3、Rockville High School (ロックビル高校)

場所：メリーランド州

対象：高校生

特徴：一般高校、ろうプログラム

ろう学生のみで400人

教室内にテレビ電話あり

様々なコミュニケーション方法(手話、口話、キュードサイン、ホームサインなど)

修士の聴覚障害免許を取得している聴・ろう教員が配属されている

英語を第二言語とする外国のろう難聴学生が多数を占めており、大学進学者は少なめである

雰囲気：廊下に座って昼食を食べている姿には、カルチャーショックを受けた

4、Maryland School for the Deaf, Frederick (メリーランドろう学校フレデリック校)

場所：メリーランド州

対象：早期教育～高等部、専攻科

重複児も多く、21歳まで受け入れる

特徴：児童生徒数 500 人

雰囲気：敷地が広く、生徒たちからものびのびとした雰囲気が伝わってきた

5、Frost Middle School, (フロスト中学校)

場所：バージニア州 Fairfax

対象：中学生

特徴：一般中学校、ろうプログラム

雰囲気：手話、口話、キュードサインなど多様なコミュニケーション方法が一つのクラス内で活発に使われている

○生活面

念願のギャロデット大学大学院に進学が決まり嬉しい反面、一年間お世話になったオーロニ大学のみなさんとのお別れはとても寂しいものでした。温暖な地域、カリフォルニア州の清々しい空気や空も印象深いものでした。最後の 8 月は別れを惜しみつつ、友達と地元探索をしながらゆっくりと過ごしました。

さてワシントン D.C.へ引っ越しをすると、慌ただしい毎日が容赦なく始まりしました。合格したからと言って、ギャロデットの学生になれるかと言えばそうではなく、数多くの手続きが必要でした。例えば、学生証の作成、健康保険の確認、オンラインの手続き、そして何より苦勞したのが予防接種でした。指定された予防接種を受けなければ、講義が受けられないのです。学内の健康センターへ行き、クリニックを紹介してもらい、バスで 20 分ほど離れた場所まで行き、注射を受けました。どの場所も教えてもらわないことには分からないのですが、オーロニ大学と比べギャロデット大学はアメリカ手話のスピードが非常に早く、読み取りには苦勞しました。

講義が始まると予習の量の多さに驚きました。教科書や本、論文、資料、映像、パワーポイントなど毎回一度の講義の前に予習が必要です。他の学生も黙々とそれぞれの課題をこなしていて、彼らからやる気ももらい集中して予習や課題を行うことができました。

クラスメイトはほとんどが聴学生ですが、彼らのろう教育に関する興味関心は高く、専門的知識や論理的能力もあります。このような方達がろう学校の先生になるのだと思うと、日本にも同様な教育支援が必要だと感じました。彼らとともに勉強したり、話し合ったり、ご飯を食べたり、映画鑑賞もしました。聴者の立場から観るろう教育とは何か、春学期はもっと彼らとの交流を深めて考えや意見を共有したいと思っています。

国際交流の面でも、様々な国の人との出会いがありました。様々な人種であふれているキャンパス。肌の違いや言語の違い、様々な国で育ったろう者がいまここに集まって、英語とアメリカ手話を使いながら生活しています。ここで目に見える彩り、見えない彩りについて、様々な例の中からそれぞれ一つずつ出したいと思います。まず前者は、髪の色の変色です。金髪や茶色、黒に染めている学生がいれば、ピンク、緑、赤、青、紫色など様々な色に染めている学生

もいます。だからといって特別なことではなく、みんなそれをおしゃれのひとつとして楽しんでいるのです。また後者は出身地の多様さです。例えば韓国人学生でもアメリカで育った、中学生でアメリカへ引っ越して韓国系アメリカ人になった。中国系アメリカ人がドミニカで中国人の両親のもとから生まれ、アメリカで育ったなど、様々な背景があり、そのどれもが新鮮で楽しく交流できました。

春学期からは、いよいよ教育実習が始まります。日本の大学での経験を糧に、自信を持って子どもたちや先生方と関わり、新たな視点とアイデアの引き出しを作っていきたいと思います。